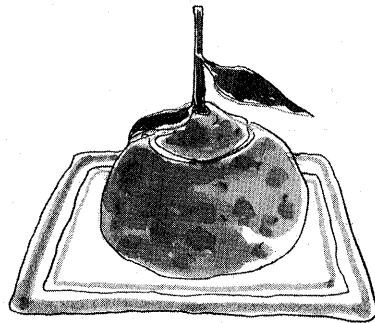


# 保育は

## 身体的行為でありながら 知的行為である

津守 真



保育の実践に慣れてくると、いつのまにか、気を抜いて保育の場に出ている自分自身に気付かされることがある。子どもとの交わりが浅くなっている。それではいけないと思いついて、謙虚な気持ちになって保育に向かう。そして保育の実践の原点を思い起こす。

子どもとかかわっている「いま」を深めら

れるように、自分の意識を変える。

自分にとってかかわりにくい子どもや、いま大変な思いで毎日を過ごしている親と、本気に向き合う。

意味も分からぬままに、子どもと応答して疲れる身体の行為そのものの中に、知性の源があることを信じて交わる。

具体的な出会いはさまざまである。

普段つきあいの薄くなっている子どもの傍に腰をおろす。自分の傍にゆっくりといてくれると思うと子どもは思いがけない姿を私に見せてくれる。近頃この子はこんなことを考えていたのかと私は気付かされる。その気になつてわきにいと、時間は短くとも、何と多くが見えることか。

長い年月、水遊びばかりやっているように見える子どもの、その遊び方が以前とはまるで違っていることを発見する。ホースで水をかけながら大声を出す。白ねんどの塊りにホースの水を噴出させて粉々にするが、その声だけでねんどうが破壊されそうな迫力がある。他の子がホースに手をふれただけで、逃げていた時とは、大違いである。コンクリートのへりに水をあてて土を削る。そうかと思ふとゆるやかに水を出しておおらかな笑いを

見せる。土をくずす。いくらでも毎日やることがある。この子とかかわっていると、私もまた同じ職場に毎日出かけて、十年以上も同じようなことを考えつづけているのに似ていると思う。同じ遊びにこだわると言われながら、これだけ継続する熱意は貴重である。

数日間お腹をこわして休んでいた子どもが久しぶりに登園する。家で冷蔵庫からジュースを出して飲むので、うすめると怒り、それをめぐる母と子の間の戦いでへとへとだと母親は訴える。家庭の夕方の情景が目には浮かぶ。こういう時も、そのひとつひとつのかかわりの質を良くすることを考えてつきあうよりほかないだろう。話の間、その子は私の膝にもたれたり、そこらをうろろしている。この頃熱中する遊びがなくなったみたいで、いまは何も見つけられなくてぶらぶらしてい

ることが多いと母親は言う。私は、それなら  
丁度、本当にやりたいことにゆきあたること  
を求めているこの時を大切にしなければと、  
一生懸命考えて話す。何を話すかというより  
も、母親との対話のその時が大切なのだと思  
う。

抱いてくれと毎日要求する子どもが来た。

私はこういうときにはすぐに応じることにし  
ている。折があったら早く床におろそうとい  
う意識をもちながら抱いていたら、その  
「時」には内容がなくなってしまうだろう。

この時は、一緒に親してみたのしむ時という風  
に意識を変えると、抱いているその時はわか  
わりの貴重なひとこまとなる。実際、そうす  
ると発見がいくつもある。騒音がつづくとな  
作を起こすことのあるこの子が選ぶ場所は、  
静かな空間であることが多い。また、私に頼

めばいつも抱いてくれるという安心感が、こ  
の子の一日の生活を安定させているかもしれ  
ない。抱かれることが毎日のたのしみのひと  
つとなつているとすれば、そういうたのしみ  
を子どもに与える者になり得ているとは、保  
育者は幸いである。

庭の高い所が上がっている子どもがいる。

落ちたら大変と下から見ている間に、その子  
はしっかりと綱を握っていることに気が付い  
た。それだけしっかりと綱をつかまえている  
のは、自分の意志力で大人の手の届かない場  
所を選んでいるに違いない。その子は地面の  
日常生活の空間では疎外感を経験することが  
多いからではないか。日頃困ることを次々に  
するその子の傍にゆくことを私もつい避ける  
ことがある。障害児と言われ、言葉を話さな  
いと言われて、本当に自分の価値を認めても

らえない寂しさを感じることも少なくないだろう。そう思うと、高い所に上るからと言って、危いから気を付けてと声をかけるだけでは済まない。その場で一生懸命考えて、親しみを通わせるようなことばをさがす。高い所から下りた後もその子と一緒に遊ぶ。そうしている、いつも走って移動する子どもがいつのまにか私の手につかまっている。

一日の保育を終えて、何と多くのことをしたかと思う。しかしふり返ってみると、何をしたのか、いちいち思い出せない。しばらく経つ間に、次第にここに記したようなことが思い出されてくる。保育の最中は、ひたす

ら、出会う子どもの側に身をおいて、そこで必要とされることに応えて動いている。この点で、保育者の生活は、極度に他者のことを考えて動く生活である。普通の生活でも、他人を配慮することは多いが、保育はその極にある行為と言えよう。

私共は、保育することをもっと大切に、尊重しなければいけないと思う。他者の側に立って動くのには、体力のみでなく、自分の向きを変える意志を必要とする。そのとき、自分は他者に対して相対化される。自分を絶対化するときには知性は失われる。保育は身体的行為でありながら知的行為である。

(愛育養護学校)